

日本文化部会

【概要】

邱 冠 禎*

はじめに

第17回国際日本学コンソーシアム日本文化部会は、2022年11月19日、オンラインにて開催された。本部会では、「モノからコトへ」というテーマのもと、教員2名と院生2名による研究報告が行われた。以下、各報告の内容と質疑応答について概要をまとめる。

1. 遠藤みどり（お茶の水女子大学教員） 「日本古代官僚人事データベースの構築と活用」

近年、歴史分野では「歴史情報学」という新たな分野が提唱され、歴史資料のデジタル化やデータベース構築を中心に、これまで紙媒体（モノ）で利用されてきた資料のデジタル媒体（コト）への転換が図られている。たとえば、個別の人事記録を集積してデータベース化することで、律令官人社会の統計分析が可能になる。

報告では、文武元年～天平20年まで（約50年分）のデータ分析が披露され、官人の変遷表をもとに位階別の人数・男女比について検討が行われた。

質疑応答では、官人数の変化について、どれほど差が出た場合に、大きな差としてみるか、誤差の範囲の判断をどうするのか、について質問がなされ、報告者からは、五位以上に入る前に「外位」が作られ、官人の制度が変化していくため、十数人の誤差があることが示された。

2. 馬雲雷（北京外国語大学・北京日本学研究中心 センター院生） 「他者と日本の神国思想」

報告者は日本の神国思想の誕生と変容を概観した上で、「他者」に焦点を当ててその役割を整理し、「他者」が果たした役割から神国思想の行方を検討した。そのうえで、神国思想はその形成・変化する過程において、「他者」と大いに関係していると結論付けた。

質疑応答では、神国思想は中世に顕在化するが、当時は外国を「他者」とするような思想・機会がなかったため、その段階の「他者」とは何を指しているのか、という点について議論がなされた。

3. 梁媚（お茶の水女子大学院生） 「中日伝統芸能の継承について」

19世紀末から20世紀へと移り変わる激動の時代を生きた名人たちは、古い伝統を受け継ぐ一方で、新しい文化や制度の影響を受けながら伝統芸能のあり方を模索した。報告者は、梅蘭芳の初めての上海公演の戲単や契約書を分析し、宣伝や契約といった側面から、移行期への対応を模索する伝統芸能の近代化の一端を窺うことができると論じた。

質疑応答では、上海で新たな形の興行が始まったきっかけ、および契約の形式が変化する前後の違いについて質問がなされ、報告者からは、前者に対しては、アヘン戦争以降開港した上海で外国

*お茶の水女子大学・院生

人が演劇を導入し、芸能人の活動が北京より多くなったこと、後者に対しては、俳優と会社が直接に契約を結ぶことが一般的になったこと、が示された。

4. 墓丸謙（パリシテ大学）

「日仏比較の視点から見る衛生マスク」

疫病予防のために鼻や口を覆う習慣は、長い歴史を持っている。マスクは、その有用性が持続する古い技術の一例であるが、形式的な連続性（主に顔を覆う簡易なモノ）の一方で、実践の意味（コト）は重要な変化を遂げてきた。報告者は日本とフランスの比較を通して、マスク着用をめぐる議論及びその課題を検証した。

質疑応答では、マスクの色・材質から文化の違いが見えるか、当時のフランスのマスクの素材にはどのようなものが使われたかについて質問が出された。

おわりに

以上、日本文化部会の研究発表についてまとめた。今回は「モノからコトへ」というテーマのもと、制度・思想・社会問題などの多様な視点から報告がなされた。コロナ禍で国際的な学术交流が行いにくい中、今回のコンソーシアムを通じて国内外の交流がより深まった。